

### **P-33** 自治体における、ロービジョン体験を取り入れた、福祉教室の試み

○岩井 梢<sup>1</sup>, 氷室 健太郎<sup>2</sup>, 平河 由美<sup>3</sup>, 永幡 幸司<sup>4</sup>, 村田 美佐子<sup>5</sup>,  
守山 正樹<sup>6</sup>

<sup>1</sup>NPO法人ウェルビーイング, <sup>2</sup>広川町役場, <sup>3</sup>福岡県介護保険広域連合柳川・大木・  
広川支部地域包括支援センター, <sup>4</sup>福島大学理工学群共生システム理工学類,  
<sup>5</sup>北九州視覚特別支援学校, <sup>6</sup>福岡大学医学部公衆衛生学教室

#### 【目的】

福岡県広川町では住み慣れた地域で高齢者が安心して生活していくために、子どもから大人まで一人ひとりが思いやりの心をもつことを目指し「福祉教育」に取り組んでいる。本研究では自治体におけるロービジョン体験（アイマスク装着）を取り入れた福祉教室プログラム作成と評価を行うことを目的とする。

#### 【対象と方法】

1. 対象：広川町のジュニアリーダー・シニアリーダー・青少年育成町民会議推進部会のメンバー25名。2. プログラム作成：2010年1月～3月。共同研究者で検討し、共感できる立場が増える、自分の持っている感覚を目覚めさせることを学習のねらいとした。3. プログラム内容：2010年3月21日；導入15分、アイマスク体験者・介助者を無作為に分けペアを組む10分、アイマスク体験20分×2回（アイマスクと介助者の両方を体験）、相手の立場に近づくことをねらいとしたロービジョン者への質問と交流30分。4. 評価方法：1回目のアイマスク体験の事前・事後に感覚（16項目）・感想（4項目）のアンケート調査、2回目のアイマスク体験後に自由記述式のふりかえりシートの記入を行った。

#### 【結果】

参加者は、25名で平均年齢17.8歳（13-32歳）、男性40%、女性60%であった。アイマスク体験者と介助者で感覚の変化を比較したところ、アイマスク体験者の方が聴覚（ $p=0.026$ ）、触覚（ $p=0.031$ ）、自分の心の様子への関心（ $p=0.013$ ）、周囲の空気や動きや風への関心（ $p=0.04$ ）が有意に高かった。ふりかえりシートから「福祉教室はやはり大切」「今日の体験を覚えておき、これからも考えていきたい」等、教室を評価するコードが抽出された。また、交流時間には、参加者から携帯、料理などに関する7つの質問が出され相手の立場を理解する時間となった。

#### 【結論】

介助よりもアイマスク体験の方が感覚を研ぎ澄ます深い体験となることが示唆された。また、体験後に相手の立場に近づく時間を設けることで積極的な交流が可能なが確認された。